

テーマ	一次骨折予防－Patient selection（対象患者の特定）－検診		
執筆者の 所属と職種 および氏名	あさひ総合病院 整形外科 医師 中藤真一	執筆年月日	2025 年 11 月 25 日

＜ポイント＞

骨粗鬆症への認識が低く、骨密度検査を受けない人が多い

検診はその問題を解決するには有効だが、実施率、受診率が低い

骨粗鬆症の認識

骨粗鬆症は沈黙の疾患といわれ症状がない。そのため認知率が低いと思われがちだが、閉経後女性のアンケート調査では、「骨粗鬆症という病気を知らない」と答えた人は 0.7%にとどまっている。しかし、6 割近くの人が「将来なる病気で、今は大丈夫だ」と考えている。また、2 割近くの人は「自分になる可能性がない」と答えている。この調査ではさらに、高い認知率があるにもかかわらず、骨粗鬆症の検査を受けたことのない人が 4 割近くに達していた。その理由として、「気になる症状がない」に加え、「きっかけがない」、「どこで検査ができるかわからない」、「どのような検査をするかわからない」といったことがあがってくる。こうした問題を解決するためには、検診が有用である。骨粗鬆症の検査を受けたことがある人では、そのきっかけとして検診が 37.1%と最も多い（図）¹⁾。

「骨粗鬆症」の検査を受けたきっかけ(n=1,924)

骨粗鬆症診療開始のきっかけは検診が多い

きっかけ	割合 (%)
家族に勧められて	3.4
友人、知人に勧められて	3.7
受診して	5.7
痛みの症状があつて	6.2
まわりの人が骨粗鬆症になった／骨折したから	7.0
骨折して医療機関を受診して	11.4
病院・薬局のポスター！冊子などを見て	20.1
医師に勧められて	20.9
その他	37.1
自治体から骨密度検診の案内を受けて	37.1

は、検診が有用である。骨粗鬆症の検査を受けたことがある人では、そのきっかけとして検診が 37.1%と最も多い（図）¹⁾。

骨粗鬆症検診の現状

骨粗鬆症検診の目的は、「骨粗鬆症は骨折などの基礎疾患となり、高齢社会の進展によりその増加が予想されることから、早期に骨量減少者を発見し、骨粗鬆症を予防することを目的とする」と健康増進事業実施要領に明記されている²⁾。検診は 40 歳から 70 歳までの女性を対象に、5 歳毎の節目年齢で行われる。対象者に検診受診の案内を通知し募集をかける。募集に応じた受診者には問診にて骨粗鬆症や骨折の危険因子を確認し骨密度測定を行う。その上で問診と骨密度測定値から受診者を 3 群に分ける。すなわち、骨密度測定値が若年成人の平均値（young adult mean: YAM）の 80%未満を「要精検」、YAM80%以上 90%未満、または YAM90%以上でも骨粗鬆症の危険因子がある者を「要指導」、YAM90%以上で骨粗鬆症の危険因子がない者を「異常なし」と判定する。この中で「要精検」の者には医療機関での精密検査を受けるように勧める。また、「要指導」の者には食事指導、運動指導などと共に、骨粗鬆症関連の保険事業への参加などを勧める³⁾。

骨粗鬆症検診実施率と受診率

2023 年度に全国で 1,737 ある市区町村のうち骨粗鬆症検診を実施したのは 1,115 市区町村（64.2%）にとどまっている⁴⁾。また、検診受診率も 2023 年度は全国平均が 5.7%である⁵⁾。骨粗鬆症検診率の高い都道府県は要介護率が低い傾向ある⁶⁾。2024 年 4 月から始まった「健康日本 21(第三次)」では、2032 年度には骨粗鬆症検診受診率を 15%にまで引き上げようという目標が掲げられている⁷⁾。

事例紹介

検診項目の検討

- ✓ 一次検診にて身長低下の問診と FRAX[®]の計算は問診のみで成立するスクリーニングツールとしての有効性を示唆している⁸⁾

病院職員を対象とした骨粗鬆症検診

- ✓ 病院職員検診で DXA 法による骨粗鬆症検診⁹⁾

脳卒中片麻痺患者と骨粗鬆症検診

- ✓ 通所リハでは脳卒中片麻痺を呈する利用者の骨量は、脳卒中発症からの期間によって低下することから、脳卒中症例は骨粗鬆症の予防や治療の必要性が高く、今後、検診の受診率と治療率の向上が必要である¹⁰⁾

骨粗鬆症検診とロコモティブシンドローム

- ✓ 予算や人手の状況に加え、どのような人を対象にするかを考慮したうえでセルフチェックと勧奨通知を使い分けることが有効¹¹⁾
- ✓ 地域の骨粗鬆症検診において、サルコペニアの割合はロコモの割合よりも少^{なく}、検診で転倒リスクを評価するうえでロコモの評価が有用¹²⁾
- ✓ 地域の中老年女性を対象とした骨粗鬆症検診では、身体機能評価としてロコモの指標が有用¹³⁾

参考資料

- 1) 阿部大介、他：わが国における閉経後女性の骨粗鬆症に対する意識・実態に関する Web アンケート調査 日本骨粗鬆症学会雑誌 5：267-276, 2019
- 2) 健康増進事業実施要領：<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/14.pdf>
- 3) 骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン 2025 年版：p 73-79
- 4) 令和 5 年度地域保健・健康増進事業報告の概況：健康増進編：<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/c-hoken/23/dl/kekka2.pdf>
- 5) 骨粗鬆症財団 2023 年度骨粗鬆症検診受診率：https://www.jpof.or.jp/Portals/0/pdf/screening_rate/screeningrate_2023.pdf
- 6) 中藤真一、他：都道府県別の骨粗鬆症診療、骨折病名登録率と骨粗鬆症検診受診率の関係 National Database of Health Insurance Claims and Specific Health Checkups of Japan の解析 日本骨粗鬆症学会雑誌 4：519-528, 2024
- 7) 厚生労働省：国民の健康の増進の総合的な推進を図るための基本的な方針：<https://www.mhlw.go.jp/content/001102474.pdf>
- 8) 伍賀 伊織、他：地域在住女性を対象とした骨粗鬆症を判定する簡易指標について 日本骨粗鬆症学会雑誌 11：219-230, 2025
- 9) 金子 真理子、他：病院職員を対象とした骨粗鬆症検診 日本骨粗鬆症学会雑誌 8：477-481, 2022
- 10) 浅井 俊博、他：脳卒中片麻痺を呈する通所リハ利用者の骨量と骨粗鬆症検診の受診状況について 日本骨粗鬆症学会雑誌 4：611-619, 2021
- 11) 高牀 夏実、他：人手・予算不足解消に向けたセルフチェックによる検診への誘導の試み 日本骨粗鬆症学会

雑誌 7 : 251-258、2021

- 12) 旭 竜馬、他：骨粗鬆症検診におけるロコモティブシンドローム評価と転倒との関連 日本骨粗鬆症学会雑誌 6 : 469-478、2020
- 13) 旭 竜馬、他：身体機能評価を導入した骨粗鬆症検診の有用性 転倒リスク評価のためのロコモティブシンドローム・サルコペニア評価 日本骨粗鬆症学会雑誌 6 : 392-395、2020

COI : 開示すべき利益相反なし